



TITLE:

北齊の中書舎人について：顔之推、  
そのタクチクスの周邊

AUTHOR(S):

榎本, あゆち

---

CITATION:

榎本, あゆち. 北齊の中書舎人について：顔之推、そのタクチクスの周  
邊. 東洋史研究 1994, 53(2): 257-283

ISSUE DATE:

1994-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154485>

RIGHT:

# 北齊の中書舍人について

——顔之推、そのタクチクスの周邊——

榎 本 あ ゆ ち

## 一 はじめに

### 二 文宣帝期の中書舍人

(一) 軍務官としての舍人

(二) 二重國都・尙書制と舍人

### 三 北齊後期の中書舍人

(一) 軍務官と北齊後期政治史

(二) 後期舍人達

## 四 結びにかえて

## 一 はじめに

北齊の天保九（五五八）年六月、文宣帝は晉陽からの北巡の途上、祁連池（天池）に到着した。帝に扈從していた顔之推にここで重大な事態がおこった。帝が彼をこの旅先で突然中書舍人に任命したのである。これに對し之推は、任命書の傳達にあたった中書侍郎段孝信に泥酔の醜態をさらすことによってこの任命を回避した。之推のタクチクスを史書が直截に記したものととして宇都宮清吉氏が指摘した著名な出来事である。但し何故彼が舍人就官を拒否したのか、その理由は不明<sup>(1)</sup>

のままである。もとより當時の文宣帝は、強度のアルコール中毒と様々の鬱屈により狂昏の態をあらわすことがしばしばであった。このような帝の身近に仕えることとなる舍人就官を之推が危惧したとも考えられる。しかしこの事件の約二年前、西魏から命を賭して北齊に亡命した之推はその勇決さを賞賛され、奉朝請として帝の左右に侍し顧眄をうけていた。したがって舍人が狂昏の皇帝の側近の官である事は、既に帝の身近に仕えていた之推が就官拒否をするその理由であるとは考えづらい。舍人の機能、及び皇帝との關係をも含めた政治世界における舍人の位置づけにこそ、その就官拒否の理由があるのではなからうか。又後年、之推が後主期に文林館の主宰者となった時、その官位が通直散騎常侍・領中書舍人であった事を考えると、舍人の機能、その位置づけに、天保年間のこととは異なるものがあり、それが舍人就官に結びついても考えられる。

中書舍人は言うまでもなく詔敕の起草を中心的職務とする中書省の屬官である。<sup>(2)</sup>長官たる監・令が魏西晉期においては詔敕起草、即ち草制の任を負っていたが、東晉以降その任は次官たる中書侍郎に移行した。侍郎の下官たる舍人は東晉・南朝劉宋中期までは、その正式名稱を中書通事舍人と言ったように、上奏文や諸司からの文書を皇帝に上呈し、又侍郎が起草した詔敕の草案を帝の上覽に供し、裁可を得た後諸司に傳達する。即ち草制に關して言えば皇帝の意志の表現たる詔敕を諸司にとりつぐ、皇帝の意志の傳達を本務としていた。しかし劉宋中期以降皇帝の身近に仕えるというその職務上の特徴により、次第に顧問の任にあたり、本務をこえる様々な權能を獲得し、草制權をも掌握するようになる。南齊の四戸と稱された舍人達にその姿は端的に表現されている。ここに到って舍人は中書省の官系を離れ獨立し、舍人省の長官として諸政をとりしきる實質的宰相となった。劉宋中期から南齊にかけて舍人に就官したのは、主に恩倖として史書に記された庶人身分出身の寒人である。彼等は皇帝の門閥貴族抑壓・皇帝權強化という志向に結びつき自身の榮達を實現した人々だった。しかし梁代に入り大きな變化がおこる。梁代舍人に就官した人士の大部分は、寒門出身の有能な士人である。又わずかではあるが門閥貴族出身者もいた。そこには家柄の如何を問わず才能によって人材を登用しようとする梁武帝の賢

才主義的理念が投影されていた。

一方北朝において舍人の活動が確認されるのは、北魏孝文帝の改革以降である。概要を述べるならば孝文・宣武帝期の舍人は、徐々に権能擴大の傾向を有しながらも基本的には「宣敕」、即ち皇帝の意志の傳達をその本務としていた。次代の孝明帝期に入り羽林軍士の變・北鎮の反亂の中で舍人達は朝廷の實力者・當權者たる靈太后・宗室勢力・元叉等に密着し恩倖的性格を強め、その権能を擴大し草制權をも掌握する。河陰の變を経て北魏極末孝莊帝期以降舍人の性格に再び變化がおこる。舍人登用に賢才主義的傾向が顯著となり、溫子昇・魏收ら當代きつての文人が舍人として草制を擔當するようになったのである。恐らくそこには北魏末動亂の中から生じた新傾向と共に南朝梁の賢才主義的舍人登用が強く影響していると思われる。しかし東魏・北齊の舍人については不明な點が多い。草制に限って言っても山本隆義氏はこの時期草制權は中書侍郎が掌握し、侍郎はこれによって大政に參與したと指摘するが、<sup>(3)</sup>舍人の機能やその政治世界での位置づけについては明確な指摘をされていない。これに對し祝總斌氏は、この時期においても舍人が草制權を有していたとする。但、魏收ら漢人中書官僚は鮮卑貴族の前に政治的には屈服せざるを得ず、その權力も限られていたとする。<sup>(4)</sup>

この北齊政治世界において鮮卑貴族が漢人貴族・官僚に優越していたとする祝氏の見解は、中國の六朝史研究者にほぼ共通している。古くは繆鉞氏、又近年では祝氏の他、後述の嚴耀中・漆澤邦氏の見解からそれはうかがえる。<sup>(5)</sup>又我國においては内田吟風氏がつとに同様の見解を明らかにされている。<sup>(6)</sup>これに對し谷川道雄氏は、東魏・北齊の政治的推進者は大體において傳統的漢人貴族であったとしながらも、東魏北齊政治史を、これら二勢力の相克ととらえるだけではなく、兩者をそれぞれ存立させている論理、つまり兩者の立脚點を見きわめなければならないとする。<sup>(7)</sup>氏は高氏政權の基盤となった北族集團の中に自由民への復歸の意思を読み取り、それは高氏政權の今一つの軍事的基盤であった漢人名族に率いられた郷兵集團の中に息づく門閥的身分制打破・身分的平準化への志向と通底するものだとする。即ち北族・漢人兩社會の中に各種民衆の自由への希求があったとするのである。この自由への希求こそ、高氏政權のトップを占めた「勳貴」の立脚

點であつた。一方傳統的貴族が高氏政權に參與する立脚點は、高歡父子が勳貴らの上に同輩中の第一人者として立ちその統率者たらんとした所にあつた。即ち覇者・皇帝としての權威を付與するものとして傳統的貴族は登用され、勳貴抑壓統制の任を負うものとされた。したがってこれら貴族は皇帝權との結合を通して始めて力をもちうるのであり、この結合を維持するため皇帝側近の恩倖に結びつく、あるいは貴族自身が恩倖化する事態が生み出された。こうした傳統的貴族側の攻勢に對し勳貴はその權勢に酔い、自分達の立脚點たる各種民衆の自由への希求を政治體制として定着しえず、北齊の滅亡をむかえたとする。

筆者の北齊政治史理解は、この谷川氏の見解に多くを負っている。氏の指摘した各種民衆の自由への希求は、官界のあり様という點に視點をしばつた時、門閥的官吏登用の打破・賢才主義的登用の問題としてあらわれる。先述したように中書舍人の登用については南北兩王朝社會でその後半期に賢才主義的性格が看取される。それは大まかに言つて唐代の「文士の極任」とされた中書舍人のあり様に通ずると思われ<sup>(8)</sup>。では北齊の舍人の登用にもこうした性格が見い出されるであらうか。又そこに他の社會、例えば南朝梁の舍人と異なる特色はあるのだろうか。又今迄に明確にされたとは言ひ難いその機能についても明らかにしなければならない。これらの點に關連して、冒頭に豫想した天保年間から後主期にかけての舍人の性格變化も考察の對象となる。本稿は、舍人を尺度として南北兩王朝社會の比較検討、六朝後期から隋唐代にかけての官僚制發達を考察する試みの一環である。

## 二 文宣帝期の中書舍人

### (一) 軍務官としての舍人

文宣帝の天保年間、舍人に就官した人物は以下の如くである。

①元文遙 北魏宗室の一員。北魏末に員外散騎侍郎起家。東魏武定年間に高澄の大將軍府功曹となる。文宣帝の即位の式典直後、登壇所で中書舍人に敍せられ、文武に號令を宣傳する任にあたる（『北史』五五）。

元文遙はこの後、後主期に趙郡王叡と協力し權臣和士開を排除しようとし逆に朝廷から追放されるまで三省の長官・次官を歷任する重臣となったが、常に臨軒大集の際は詔敕の宣傳を擔當し、「聲韻高朗にして發吐滯り無し」（『北史』本傳）だったという。それは繆鉞・漆澤邦兩氏の指摘のように、鮮卑人たる文遙が鮮卑語で皇帝の命令傳達にあたつた事を意味している。この點は胡漢が共生する北齊社會の一面を象徵しているが、彼の舍人としての職務は、舍人が元來有していた皇帝の意志の傳達という機能にあったと言えよう。

舍人が有する樞密顧問の權能を體現するのは次の人物である。

②宋士素 東魏から北齊初期にかけて酷吏として活動した宋遊道の子。沉寂にして少言、才識ありという人物。中書舍人となる。趙彥深は彼を内省に引き入れ機密に參與させた。中書・黃門侍郎を歷任し、以後二十年近く機要の任にあつた（『北齊書』四七・『北史』三四）。

宋士素の舍人就官の時期について明記はないが、恐らく寒門出身で高歡父子の重用をうけ宰相となった趙彥深（『北史』五五）が、天保末年に侍中となった時、士素を内省に引き入れたと思われる。

以上二名の舍人が從來の舍人と性格を共にしているのに對し次の人物はいささか異なつた性格をもっている。

③刁柔 渤海饒安の人。四代前の刁暢は南朝劉宋朝成立直前に北魏明元帝の下に亡命して來た。以後刁氏は次第に名族化し、柔の祖母は司空渤海の高允の娘である。柔は儀禮・族譜に詳しかった。元象年間晉陽で永安公浚ら高歡の諸子の教育にあたつた。天保元年、國子博士・中書舍人となり、魏收の推挽により『魏書』編纂に参加した（『北齊書』四四・『北史』二六）。

刁柔が中書舍人となつたのは、儀禮を中心とするその教養と、『魏書』編纂に参加した事から窺われる史學の才による

と思われる。この刁柔のあり様は、一面南朝梁の舍人達と相似するが、又後述する後主期の舍人達にも通ずるものがある。

以上三名はそれぞれ性格を異にしながらも文官として活動している。これに對し専ら軍事を擔當する一群の舍人達が存在する。

④王士良 太原晉陽の人。その祖先は西晉末永嘉の亂中涼州に避難し、北魏太武帝が沮渠氏を平定した際曾祖景仁は北魏に歸順し敦煌鎮將になった。祖父禮は平城鎮司馬となり、そこで代郡に居を移したという。北魏末、士良は爾朱仲遠・紇豆陵步藩・高歡とその主を變えていった。東魏代鄴に遷都後、高澄が京畿大都督となった際、その司馬となり外兵參軍を領した。武定年間、高澄の大將軍府屬・從事中郎となったがなお外兵事を攝る。潁川に出鎮した西魏の王思政に對し高澄が出撃する際、澄は士良に命じ并州を居守させた。文宣帝が即位すると給事黃門侍郎・領中書舍人となるが、以前にひきつづき并州の兵馬事を總知した『周書』三〇。

⑤獨孤永業 本姓は劉、中山の人。母の再嫁先の獨孤家で養われた。軍士の集團に入り、才幹にめぐまれ弓馬にもたくみだった。簡擢を受け定州六州都督に補せられた。晉陽で宿衛中、高澄に見出され、その中外府の外兵參軍となる。天保元年、中書舍人、ついで豫州司馬となった。書計を解し、歌舞にもたくみだった爲文宣帝に氣に入られたという（『北齊書』四一）。

⑥盧潛 范陽涿の人。北魏太武帝に召し出された漢人名族の領袖盧玄の玄孫。容貌瓌偉にして言談を善くし、少くして成人の志向があつた。高澄の大將軍府西閤祭酒から中外府中兵參軍に轉じ、機密に關わる事柄をほとんどこなし、高澄から賞賛された。天保元年中書舍人となったが「奏事忤旨」の爲免官となる。中書・黃門侍郎と爲るが、門閥貴族の領袖尙書令楊愔の一派である鄭子默の讒言により地方官に左遷される。廢帝期から後主期にかけ十三年間、南朝陳との最前線たる壽陽を鎮守し、陳軍をししばしば撃破して陳人に恐れられた（『北齊書』四二）。

⑦唐邕 太原晉陽の人。高歡の外兵曹に直し文帳を擔當した。書計に明るく暗記力にすぐれ、拔擢されて高澄の大將軍府督護となる。高澄が梁軍の補虜蘭京に暗殺された際、高洋（文宣帝）の手足として事態鎮靜化につとめ評價された。

天保元年、給事中・兼中書舍人となる。天保三年、文宣帝が代郡の庫莫奚を親征する際、騎兵事を典っていた黃門侍郎袁猛は、割配（恐らく晉陽の鮮卑兵を分割し親征軍に編成配置する事を意味すると思われる）の措置が遅れた爲罰せられ、唐邕が代わって騎兵事を監することとなる。後、文宣帝が長城をこえて親征する際には必ず陪從し、軍事上の機密を專掌した。督將以下軍吏以上の功績・資歷をすべて暗記し、帝の御前で兵士の觀閲をする時も文簿なしでその官位と姓名を唱えることができたという。文宣帝の信頼はきわめて篤く、母の婁太后に「唐邕一人で千人の兵士に相當する」と賞賛し、丞相斛律金よりも上席に邕を坐せしめた。天保十年に兼給事黃門侍郎・領中書舍人となる（『北史』五・『北齊書』四〇）。

⑧白建 太原陽邑の人。高歡の大丞相府の騎兵曹に入り文帳を典る。書計に明るく同局にいた人々の評價を受けた。天保十年に兼中書舍人となる。武成帝の河清二年、員外散騎常侍になるがなお舍人を兼ねていた（同前）。

この五人の舍人は、家柄という點で言えば名族出身の盧潛から何らの門地も有しない唐邕・白建まで幅広い階層の出身である。また獨孤永業は、獨孤氏の養子であり中山の軍士集團（恐らくは中山に常駐していた中品羽林虎賁軍團ではなからうか）の中で成長したというからには、漢人であったにしろ北族化した人物と言えよう。又王士良が太原王氏の一員というのもとより疑わしく曾祖の代から北鎮に出仕している事から考え、北族か北族化した漢人ではなからうか。白建もその姓から言って胡族の可能性がある。こうした様々な出身の人士が、共にその才により舍人となっている事は、この軍務官たる舍人の登用に賢才主義的理念が働いていると言えるのだが、この點はしばらく措き、彼らの才、及び舍人としての機能について更に考察してみたい。

彼等はすべて軍務に携る者として舍人の地位を得ているかのである。それは高歡・高澄の丞相府・大將軍府・中外



府、即ち晉陽の霸府の騎兵・外兵・中兵曹に出仕し評價を得、北齊朝の成立後舍人となっている點に端的に看取される。舍人と騎兵・外兵曹との關連の強さは、次の記事からも明らかである。

齊朝高祖の相と作るに因りて、丞相府外兵曹・騎兵曹、兵馬を分掌す。天保、受禪に及び諸司監は咸く尙書に歸するも、ただこの二曹は廢されず。唐邕・白建をして主治せしめ、之を外兵省・騎兵省と謂う。其の後、邕・建位望うた隆ければ、<sup>おのち</sup>各省主と爲り、中書舍人をして二省の事を分判せしむ（『北齊書』四〇唐邕傳、『北史』五五同傳もほぼ同じ）。

即ち、舍人たる唐邕・白建が官位を高くし舍人の任を離れて後も（これは武成帝期以降の事である）、省主たる彼らの下でこの二省の實務を擔當したのは舍人なのである。

この二省が設立された正確な時期は、「相國府を罷めるも騎兵・外兵曹を留め、各一省を立て別れて機密を掌る」（『北齊書』四 文宣帝紀 天保元年冬十月壬辰の項）から明らかである。この二省については周一良・嚴耀中兩氏に指摘があり、<sup>(10)</sup>兩氏ともこの二省が并州晉陽に置かれた尙書省、即ち尙書并省とつながりの深いものであり并省と同じく晉陽に置かれたとする。又楊耀坤氏によれば、騎兵省は中軍、即ち朝廷直轄の中央軍を管掌した。即ち當時の軍隊の構成から考え中軍の主要部分は騎射にたくみな鮮卑兵で占められていた爲、騎兵省と呼ばれた。一方外兵省は、漢人から召募または徵發された歩兵を主體とする地方軍を管掌したとするのである。<sup>(11)</sup>周知のように鄴周邊の中軍、即ち京畿兵を管掌するのは京畿大都督府であるから、<sup>(12)</sup>これと騎兵省との關わりなど疑問は多いが、三氏の見解はひとまず首肯しえよう。

ただ是非とも確認すべきは、鄴の尙書省（尙書鄴省）のうち兵事をあつかう五兵尙書と騎兵・外兵省との關連である。この點は次のいくつかの史料から幾分明らかにしうる。

（唐）邕、性識明敏、時事を通解す。齊氏一代兵機を典執す。凡そこれ九州の軍士・四方勇募の強弱多少、番代の往還、及び器械の精粗、糧儲の虛實は精心事に勤め、諳知せざるなし（『北齊書』本傳）。

これによれば唐邕は、「九州の軍士」（鮮卑兵を中心とする職業軍人乃至兵戸）や「四方の勇募」（漢人を中心とする召募兵）の數と兵力狀況、「番代の往還」（上記兵員の諸戰役への参加と歸營）についての情報を把握し、兵器・兵糧の管理をも擔當している。一方五兵尙書は『隋書』二七 百官志中によると、その左中兵曹が「諸郡督の告身・諸宿衛官らの事」を、右中兵曹は「畿内の丁帳・事力・蕃兵らの事」を、左外兵曹が「河南及び潼關已東の諸州」、右外兵曹が「河北及び潼關已西の諸州」のそれぞれ「丁帳及び發召征兵などの事」を掌っている。即ち五兵尙書は楊耀坤氏が述べているように兵役・力役の征召に關わる具體的事務をその任としていた。<sup>(13)</sup>なお『北齊書』四一 皮景和傳に、景和が并省五兵尙書に爲ったとの記事がある。これによれば尙書并省にも鄴省と同じく征召・徵兵事務を擔當する部局があったと思われる。したがって騎兵・外兵二省は、鄴と晉陽の兩五兵尙書を通して集められた各種兵員を掌握し、彼らを動員し軍團に編成配備するという機要に關する事を擔當していたと言えよう。又唐邕の紹介の中で述べたようにに彼は軍吏以上督將以下のすべての兵員の功績・資歷を暗記していたという。それは彼が兵員の補任・恩賞についても深くタッチしていた事を示している。即ち騎兵・外兵省は二つの五兵尙書の上に立ち、軍務を總覽する機能を有していた。その二省の統括者である舍人は、用兵・統帥を除くほとんどすべての軍權を掌握していたと言える。獨孤永業・盧潛・王子良は直接この二省に關わってはいない。しかし彼らも唐邕・白建と同じく軍務を擔當する才能の持ち主として舍人に登用されたと思われる。獨孤永業が書計に明かったのは、兵員・兵糧・兵器の計算・管理に適する才の持ち主だった事を示している。王子良は文宣帝の即位直後に舍人として并州、即ち晉陽の兵馬事を管掌している。盧潛も中外府中兵參軍として機密に關わっているが、それは霸府の直轄軍、即ち晉陽兵の管掌を意味している。彼は天保元年「奏事忤旨」により舍人を免官されているが、それは軍務官としての彼の意見具申が文宣帝に納れられず、舍人からはずされたのかもしれない。

天保年間の前半五年間は文宣帝が政治・軍事・社會經濟體制の整備につとめた時期とされる。<sup>(14)</sup>勳貴・門閥貴族の二大勢力の陰にあって目立たないが、この軍務官たる舍人が北齊軍事體制の整備に多大な貢獻をしている事は銘記すべきであ

る。天保年間後半には、文宣帝による宗室・勳貴・漢人官僚に對する殘虐な彈壓が頻發しているが、谷川氏によれば宗室・勳貴の誅殺の陰には楊愔ら門閥貴族グループの働きかけがあった。<sup>(15)</sup>即ち二大勢力が皇帝をはさんで抗争を展開していたのであるが、この抗争中も軍務官たる舍人が着實に力を伸ばしていた事も指摘しておきたい。こうした舍人は先にも少し觸れたように武成帝期以降も存在した。從來の舍人とは全く性格を異にする、換言すれば北齊舍人の一大特色ともいべきその存在が示す意味は何なのか。從來の舍人のあり様からすれば鄴都の皇帝の側近くに侍り、詔敕の傳達・起草、各種の顧問應對を掌るべき舍人が晉陽に恐らく常駐し軍務を擔當していた意味は何なのか。この點に關し節を改めて北齊の二重國都制、それと密接に關わる二重尙書制との關連の上で考察してみたい。

## (二) 二重國都・尙書制と舍人

周知のように北齊は鄴と晉陽の二つの國都を有し、又それぞれに尙書省が置かれるという二重尙書制が施かれていた。

この二重尙書制についての專論は、管見の及ぶ限りでは嚴耀中氏の論考のみのようである。<sup>(16)</sup>氏は、胡漢の二元體制が直接に投影されたものとして二重尙書制をとらえる。即ち晉陽は地理的條件から西魏・北周との戦いの歸趨を決する軍事的重要な地點であり、高氏政權の軍事的基盤たる舊六鎮からの降戸・兵戸である鮮卑軍士・勳貴達が家族ともども配備された。

高歡の大丞相府(霸府)を母胎とする尙書并省は軍事的首都たる晉陽の地位を反映して軍務をその本務とした。又勳貴軍功階層に對する服務をも特殊任務としていた。これに對し鄴都是文化・文治の中心地であり、鄴省は漢人士族・文人を政權に参加させる爲の機關である。北魏前期の胡漢二元體制に起因する胡漢の對立・矛盾は北齊社會にも存在し、并省鄴省の並立、即ち「尙書雙省制」をもたらした、と。

これに對し谷川道雄氏は斷片的ではあるが二重國都制について、それは覇者たる高歡父子の二つの側面を反映したものと<sup>(17)</sup>する。即ち、覇者たる高歡父子は、一面では勳貴・元老に並ぶ同輩として彼らの協力を得なければならず、それは晉陽

の軍事力を背景とした鄴の舊政權・東魏朝廷への威壓となって現われた。他面高氏の權威は勳貴に對しても保持されなければならぬ。それは鄴の東魏朝の權威を背景とすることによって實現された。氏が述べられたのは東魏についてであるが、北齊の二重國都制にもこの覇者の二面性が投影されていると示唆されている。

谷川氏の論理を筆者なりに前述の嚴氏の見解をもふまえて北齊代の二重國都・尙書制にあてはめてみよう。皇帝、特に文宣帝は、父の同輩者や弟達・有力宗室に對しその皇帝としての權威を保持する爲に鄴に集結した漢人名族・官僚の政治力、あるいは文化といった晉陽にはない要素を必要とした。それが鄴を東魏にひきつづき北齊の政治的・文化的國都たる地位に留めた。他面軍事的には晉陽の軍團にその權力基盤を置かなければならず、それは晉陽を軍事的首都たる地位に引き上げた。二つの尙書省は二つの國都の機能を端的に表現するものとして存在した。我々は二つの尙書省の具體的機能や設置された経緯については嚴氏の見解によらねばならないが、覇者における權威と權力の相互關連という谷川氏によって示唆された問題により多くの關心を拂うべきである。なぜならばこの問題は、南朝の覇府と朝廷、さらには我國中世の幕府と朝廷との關連というより廣い問題を考える契機となるからである。特に南朝との比較は、北齊の二重國都・尙書制の特色を明らかにする手段となる。

南朝でも覇府と朝廷の並立は存在した。劉宋の劉裕と南齊の蕭道成はその受禪以前に、建康の東府城に覇府を置き臺城の朝廷に對峙した<sup>(18)</sup>。覇府と朝廷との物理的距離が極めて短い事が特徴である。梁の蕭衍にいたっては臺城内に覇府を開いている<sup>(19)</sup>。南朝の覇府の今一つの特徴は、國臺設置・受禪を経て新王朝が成立し、覇府も速やかに臺城内の新王朝のピラミッド型官僚組織の中に移行・溶解している事である<sup>(20)</sup>。晉陽の覇府が高歡によって永熙元(五三二)年に設置され、天保元(五五〇)年の文宣帝の受禪後も尙書并省として北齊一代存続した事の特異性が改めて確認される。晉陽の覇府と南朝の覇府とのこれらの違いは何によるのだろうか。晉陽の覇府が尙書并省として鄴省と對峙した點については、嚴氏の言われたその軍事上の重要性・覇府に結集した鮮卑勳貴の存在は確かに見逃せない。ただ今一つ言える事は、覇府内の人的關係

が南朝と晉陽の霸府とは異なっていたのではないか、という點である。即ち南朝の霸府内の覇者と元老・功臣との關係には革命軍團形成當初からのかなり明確な上下關係が存在し、その爲スムーズにその關係は新王朝のピラミッド型官僚組織内の君臣關係へと移行しえたのではないか。例えば蕭衍は革命軍團形成時、南齊の宗室の一員であり、文武の才に秀でた名士であり、雍州刺史であつた。蕭道成も淮陰軍鎮長官として、その革命軍團の中核部分を形成した<sup>(21)</sup>。この兩者と多少趣きを異にするのが北府軍團内の同輩集團を母胎として革命軍團を形成した劉裕である。彼は功臣との上下關係を造り出す爲に、同輩の劉毅・諸葛長民らの肅清、南燕・後秦討伐という強引な手段を取り、受禪を實現している<sup>(22)</sup>。この南朝覇者の元老・功臣らに超越した地位はそれ自體一つの權威であり、その霸府は朝廷にまがう權威と權力を兼ね備え、朝廷近くに存在した。既にして權威を有していた覇者にとって門閥貴族の承認によって皇帝たる權威を付與される事は、もはや形式的な最後の手續きに過ぎなかつた。

これに對し高歡父子が霸府と朝廷の一元化をなしえず、國都・尙書省の二重體制が存在したのは、高歡父子と勳貴・功臣層との距離がきわめて近かつたせいであろう。こうした状況の中で高歡父子、特に文宣帝は切實に權威を求めた。楊愔ら門閥貴族の支持の下、勳貴の反對をおしきつて受禪を強行したのもその一つのあらわれである。が、何よりも重要なのは勳貴が重きをなしている軍政面で、皇帝としての主導權を確立する事であつたろう。百保鮮卑の設立・漢人勇士の簡擇や、數多くの親征は、もとよりそのあらわれである。が、これらの點と並んで各種兵員の確保と兵器・兵糧といった物質面も含んだ戰鬪集團の維持・管理は、特に樞要だつたと言えよう。それは軍事力を皇帝に結び續ける爲に必須の事柄である。それを擔つたのが軍務官たる舍人なのである。ではなぜ彼等は中書舍人の官を與えられたのか。冒頭で述べたように北魏孝文帝期以來の舍人制の發達の中で、舍人は先ず皇帝の意志の傳達者、即ち使者・代理人だつた。次にそれは皇帝親近の官となつた。更に舍人は權能を擴大しその樞要な地位にふさわしい有能な人士が登用される賢才主義的色彩の濃いポストとなつた。東魏代には寒門士人とともに崔肇師（清河東武城の人。北魏末停年格を立てた尙書右僕射崔亮の孫。『魏書』六六）・

陸印（『北齊書』三五・『北史』二八）という胡漢の一流貴族出身者が舍人となっている。それはこのポストの賢才主義的色彩をより鮮明にするとともに、その優崇化をも示している。即ち唐邕ら軍務官が、皇帝から篤い信頼を寄せられたその代理人であり、かつ門地を問わずその才によって登用された人物である事を舍人の官は當時の人々に印象づけた。この地位を以て軍務官達は晉陽で勳貴の中に立ち混じり鮮卑兵士の上に立って軍務を遂行した。前述したように武成帝期まで彼らに統帥権は無かった。この點は勳貴ら將軍達との間に妥協・調和がとられていた事を意味する。しかし兵員の編成配備等を含めて勳貴との間にしばしば緊張を生ずる事は容易に推測される。したがって一般の漢人士人にとってその地位は樞要であるが危険を伴うものと見られたのではなからうか。顏之推のタクチクスはこうした點から生じたと思われる。

之推の舍人任命のあった天池行幸の前年、即ち天保八年、文宣帝は即位直後に開始した長城建設をより完全にする爲長城内にもう一重の長城を庫洛拔から鳩紇戌まで四百餘里にわたって建設した<sup>(23)</sup>。この重城を含めた長城一帯の諸鎮の軍事を總監していたのは趙郡王叡である。叡は天保九年樓煩に行幸して來た帝の下に伺候している。樓煩は天池のごく近くであり又重城に接近している。したがって六月の天池行幸は重城の現地視察を兼ねていたと言えよう。北方の長城建設の背景には勿論突厥との關係に緊張が増していた事がある。この軍事的緊張の中での舍人任命は、帝が之推に期待したものが文官のそれではなく、軍務官としての任務遂行だった事を窺わせる。もとより推論の域を出ないが、當時の舍人の性格と軍事狀勢を考える時、こうした推測も許されるのではなからうか。

翌天保十（五五九）年十月、文宣帝は晉陽で死亡する。その後の政治史は文宣帝に重用され勳貴抑壓に主導的な働きをした楊愔ら門閥貴族勢力と、勳貴・功臣・宗室との鬭いで始まった。孝昭・武成・後主期の政治展開の中で、一旦勝利を収めた勳貴に對し、祖廷を中心とする漢人貴族・官僚は新たな攻勢に出る。次章では軍務官の動靜を中心として北齊後期政治史を概観し、次に後期舍人の考察に移りたい。

### 三 北齊後期の中書舍人

#### (一) 軍務官と北齊後期政治史

文宣帝の死後その子廢帝殷を擁した楊愔らはすべての政治的權限を掌握する爲、文宣帝の弟常山王演（孝昭帝）・長廣王湛（武成帝）を新帝と共に鄴へ移動させた。谷川氏が指摘したように高歡以來の晉陽・鄴の二元體制を否定し鄴に政治權力を一元化しようとしたのである。<sup>(25)</sup>これに對し兩王はクーデターによつて楊愔一派を殺害し、軍國の政務はすべて晉陽の大丞相・都督中外諸軍事たる常山王によつて裁可された。政治・軍事上の全機能が晉陽に一元化されたのである。中書機能も例外ではない。常山王は大丞相たる期間すべての詔敕を晉陽で魏收に起草させた。乾明元（五六〇）年八月の卽位後は陽休之に中書權限を委せ晉陽で詔詒を掌らせ、魏收を鄴に追いつ返している。これは楊愔と深い交友關係にあった魏收への冷遇を意味している。ちなみに孝昭帝は魏收の今一つの權限である監史についても著作郎祖延にとつてかわらせようとした。<sup>(26)</sup>こうした孝昭帝の晉陽重視の背景には帝の楊愔肅清を支持した勳貴層の存在があつた。

孝昭帝が翌皇建二年十一月急死すると、弟の武成帝が卽位し、再び鄴と晉陽との二元體制が施かれた。しかし文宣帝期と異なる點は、鄴都の實權を掌握したのが寒門出身の尙書令趙元深や恩倖の右僕射和士開らであり、晉陽の軍權が唐邕（外兵）・白建（騎兵）に全面的に委託された事である。<sup>(27)</sup>即ち鄴・晉陽兩都において漢人名族・勳貴・宗室らにかわり、より下層の身分出身の人士による實權掌握が進行していた。中書省においては武成帝卽位とともに祖延が中書侍郎となり實權を掌握した。<sup>(28)</sup>彼は范陽郡出身の名族であるが、谷川氏が貴族の恩倖化として指摘したのは正に疑の事である。

天統四（五六八）年十二月の武成帝の死をうけ後主が親政を開始すると武成帝期の實權者が宗室・勳貴をまきこみそれぞれ黨派を組み抗争を繰り擡げた。この闘いの中で關鍵となつたのは晉陽・京畿府の軍事力である。武平二（五七二）年

七月後主の弟琅邪王儼が和士開を倒したのは京畿大都督として掌握していたその軍事力によってである。琅邪王は勳貴の中で最大の實力者斛律光によって敗られ、その直後の同年十月京畿府は領軍府に統合され、祖珽がその實權を掌握した。<sup>(29)</sup>翌三年正月、珽は尙書令に遷った唐邕の後繼として左僕射となり、同年七月斛律光を死に追いやった。それは光が北周に通じているというデマを流すという奸計によるものだが、領軍府の軍權を掌握していたからこそ可能だったのではないか。

斛律光の死後、祖珽は「機衡を専主し、騎兵・外兵事を總知」(『北史』本傳)したとあり、それは祖珽と唐邕(外兵・白建(騎兵)の間に何らかの提携・妥協が成立していた可能性を示している。なお祖珽が、以上に述べた尙書左僕射としての地位、鄴と晉陽の軍權の他に、鄴の文林館に結集した漢人貴族・士人グループをもその力の基盤としていた事はよく知られている。<sup>(30)</sup>文林館の創設は武平三年二月、即ち斛律光の死亡した三年七月の時點で、祖珽はその勢力基盤をすべて掌握していた事になる。しかし珽は武平四年のなかば頃、恩倖陸令萱母子との權力鬭争に敗れ失脚している。その數箇月前の同年正月、恩倖の并省尙書令高阿那肱は錄尙書事となり、外兵及び内省の機密を總知している。<sup>(31)</sup>これは外兵省の軍權が恩倖派の手に落ちた事、恐らく唐邕が祖珽から恩倖派へと乗りかえた事を示していると思われる。即ち祖珽失脚の一因は、軍權の喪失にあると言えよう。崔季舒・劉逖・封孝琰ら漢人名族・士人達は、祖珽の失脚後聞もない同年十月、陳軍の壽陽占領に驚き晉陽へ移動しようとする後主を諫めた事を契機とし、恩倖勢力によって誅殺に追いこまれた。漢人名族の政治勢力としての命脈はここに完全に断たれた。

白建については不明だが、唐邕は北齊の滅亡時まで外兵(恐らく騎兵も)の實權を掌握し續けていた。それは次の二事によって知る事ができる。武平六年閏月、北周軍の進攻を禦ぐ爲河陽に出撃しようとしていた右丞相高阿那肱は軍團編成について唐邕に要請をしたが、邕がその一部しかききとけなかった爲兩者の間に對立が生じたという。<sup>(32)</sup>又武平七年十二月、即ち北齊滅亡の直前、晉陽で外兵・騎兵の機密は侍中の斛律孝卿に委ねられたが、孝卿は唐邕に對し一切「詢稟」し



なかった爲邕は自尊心を深く傷つけられ、晉陽から鄴へ逃亡する後主を見限り、<sup>(33)</sup> 晉陽で高澄の第五子安德王延宗を帝位に即け北周軍に最後の抵抗を試み、降伏している。この最後の抵抗戦では兵士はもちろん童兒・女子までが輓石を投げ周軍に抵抗したという。<sup>(34)</sup> 外兵・騎兵事を總覽する立場にあった高阿那肱・斛律孝卿が、軍團編成について唐邕に要請したり、あるいは邕におうかがいを立てるべきとされていた事は、晉陽の軍權が最後まで唐邕という軍務官出身者の掌中にあった事を示している。なお唐邕は武平五年二月、朔州刺史南安王思好の反亂の際、その征討軍の中心として平定にあたった。<sup>(35)</sup> それは唐邕がかつて手にする事のなかった統帥權をも掌中にしていた事を示している。

以上の簡単な記述から窺われるように、唐邕・白建は、祖珽・勳貴・宗室・恩倖の鬭いの中で、キャスティングボートを握っていた。彼らの力の根源は、軍務官として心血をそいで經營・管理にあたった北齊の軍團と、姓名は判然としないが兩者の指示の下、晉陽の騎兵・外兵省で軍事上の實務を遂行していた中書舍人の活動にあったと言えよう。では他の後期舍人は、唐邕・白建が次第に重きをなしていく政治世界の中でどのようなあり様をしていたのか、節を改めて考察したい。

## (二) 後期舍人達

楊愔に擁立された廢帝殷の下で舍人となったのは次の人物である。

⑨ 封孝琰 渤海裔の人。郷兵集團を率いて高歡を支持した漢人名族封隆之の甥。貴族的風格の持ち主で祕書郎に起家

し、天保元年太子舍人となる。起復後、晉州法曹參軍を経て再び太子舍人となり、乾明元年中書舍人となる（『北齊書』二二）。

その舍人としての機能が何であったか全く不明であるが、貴族としての出自・風格から考え彼は楊愔によって東宮の側に選ばれ廢帝の即位とともに中書舍人に横すべりしたと思われる。彼は武成帝期に中書侍郎と爲ったが和士開と不仲だ

った爲政治的には不遇だった。後主期祖珽が政權を掌握すると文林館に入り修文殿御覽の編纂に参加した。文筆の才は無かったが、やはり貴族的風格・身のこなしによって人々の敬慕を受けた。前節で述べたように祖珽失脚後の武平四年十月崔季舒らと共に誅殺された。

孝昭期の舍人として次の兩名がいる。

⑩陸彥師 鮮卑貴族の出身。好學で屬文を解した。封城王攸が司州牧となると(天保七年の事)その主簿となり、中外府東閣祭酒・中書舍人・通直散騎侍郎・中書・黃門侍郎と遷る(『隋書』七二・『北史』二八)。

その舍人就官の時期について明記されていないが、舍人の直前の官である中外府東閣祭酒は、明らかに常山王演(孝昭帝)が晉陽においた中外府の府佐である。彥師は府主の王の即位とともに舍人になったと言えよう。なお『北史』によれば彥師の長兄陸印は、東魏期高澄の大將軍府主簿・中書舍人兼中書侍郎・中書侍郎(本官)と遷り、北齊初年に給事黃門侍郎・吏部郎となっている。又印の弟、駿・杳・鸞とともに中書舍人から黃門侍郎・散騎侍郎となっている。印から彥師にいたる兄弟が東魏から孝昭期にかけ次々と舍人・中書黃門侍郎となっている事は、この昇進コースが固定化しつつあった事を窺わせる。

⑪裴澤 『北史』七 齊本紀中に、孝昭帝が政務上の缺點を臣下にたずねた様を敘述し、「曾て舍人裴澤に在外の議論得失を問う」とあり、裴澤が「有識の士、咸く細なるを傷むと言う。帝王の度、頗る未だ弘からざると爲す」と答えたとしている。

これは舍人が側近として帝の顧問にあたっている事を示している。一方『北齊書』三十一 王暕傳に、漢人名族たる王暕・陽休之を誣告した人物として裴澤の名をあげ、「帝、齋師裴澤・主書蔡暉をして群下を伺察せしむ。好んで相い誣枉すれば、朝士呼びて裴蔡と爲す」とある。この二つの記事中の裴澤が同一人物であるならば、彼は帝の耳目たる恩倖の寒人と言えよう。

武成帝期に移ろう。

⑫荀士遜 廣平の人。その文は清典と賞賛された。東魏末に司州秀才に擧げられたが天保十年まで官に就けなかった。

孝昭期に碩儒馬敬徳の推薦で中書主書となり、武成期に中書舍人となり文辭の才により重用され、後主期に中書侍郎となる(『北齊書』四五 文苑)。

⑬李德林 博陵安平の人。幼い頃から學才・文才に秀で、天保八年定州刺史任城王潛によって秀才に擧げられたが、與えられた官が「西省の散員」たる殿中將軍であつた爲就官せず歸郷した。孝昭期に鄴の長廣王の下で高元海と共に機密を參掌する。王が即位すると奉朝請となり舍人省に直した。天統中に給事中となり中書省に直し詔誥を掌る。舍人に遷り中書侍郎②宋士素と侍中趙彥深の副官として機密を典る。武平三年祖珽は侍中となり趙彥深を中央政界から追放したが、徳林の才能を高く評價し中書侍郎として草制を掌らせた。文林館が創設されると顔之推と共に館事を主宰した(『隋書』四二)。

後期の舍人は以下の人々である。

⑭顔之推 天保九年に舍人就官を回避した後、河清末年に趙州功曹參軍、武平三年の文林館創設とともに待詔文林館となり司徒錄事參軍の位を得ている。之推の才を高く評價していた祖珽は彼に李徳林とともに館事を掌知せしめ、館中から後主に上呈する文書を一手に引き受けた。通直散騎常侍に遷り俄に中書舍人を領した。後主の恩寵篤く、勳要者の憎惡的となった(『北齊書』四五 文苑)。

⑮陸乂 ⑩陸彥師の兄印の子。文才があり十九歳で司州の秀才に擧げられ祕書郎・南陽王文學・通直散騎侍郎・待詔文林館・兼中書舍人となる。父の印は李徳林を高く評價し乂に對し徳林をみならうよう命じたという(『北史』二八 本傳・『隋書』四二 李徳林傳)。

⑯王劼 太原の人。魏收の開府參軍から太子舍人を經て待詔文林館となる。祖珽・魏收・陽休之らが忘却した故事の出

典について全て言いあて賞賛をうけた。後に中書舍人と爲り、齊の滅亡を迎えている（『隋書』六九）。

①魏濟 鉅鹿下曲陽の人。魏收の宗人。屬文に秀でていた。琅邪王儼の京畿大都督府鎧曹參軍・殿中侍御史となる。魏收らとともに五禮の編修にあたり御覽の撰定にも加わる。殿中郎・中書舍人となり李德林とともに國史の編纂にもあたる（『隋書』五八）。

②辛德源 隴西狄道の人。天保年間賢才主義の人事を行なったとして著名な吏部尙書辛術の族子。十四歳で屬文を解し書記を博覽した。天保中奉朝請に起家し員外散騎侍郎・比部郎中・待詔文林館となり、尙書孝功郎中から中書舍人に轉じる（『隋書』五八）。

③元行恭 ①元文遙の子。父の風があり俊才を有した。中書舍人・待詔文林館となる（『北史』五五）。

元行恭はその俊才（恐らく父譲りの語學の才）により舍人となったと思われるが、特に才能が無く家族の蔭で舍人となった人物がいる。

④馮慈明 父の馮子琮は妻が武成帝の胡皇后の妹だった爲武成期・後主期に權臣となったが和士開と對立し、琅邪王儼を動かして士開を殺害した。しかし後に王と共に殺された。慈明は「威屬の故」を以て十四歳で淮陽王開府參軍事となり司州主簿を経て中書舍人となる（『北齊書』四〇・『北史』五五 馮子琮傳・『隋書』七一 本傳）。

⑤張子瑜 濟北の人。父の張景仁は草隸にたくみで東宮時代の後主の書道教師となり恩顧を受けた。後主の恩倖胡人何洪珍は甥に子瑜の娘をめあわせている。子瑜は父の業も承け繼がず何の才も無かったが、何洪珍との姻戚關係により舍人に拔擢され更に給事黃門侍郎となる（『北齊書』四四）。

⑥張德沖 中山の人。父の張雕虎は貧賤の出身だったが明經の故に霸府に入り、高歡の諸子の教育にあたった。後主と琅邪王儼の侍讀となり後主の絶大な信頼を得た。武平四年十月崔季舒らとともに誅殺されている。德沖は帝師の子である爲早くから拔擢をうけ員外散騎侍郎・太師府掾から中書舍人となり、例に隨って待詔文林館となる。父の誅殺後

北邊に流罪となる（『北齊書』四四）。

なお唐邕の子君徹（『北齊書』四〇）も就官時期など一切不明であるが舍人となっている。彼の場合は父の下で晉陽の軍務に従事したのかも知れない。

では以上の後期舍人の特徴は何か。第一に⑨封孝琰⑩裴澤そして蔭による舍人を除き、彼らは全て文才・典故・禮學等すぐれた學才の持ち主だった。明らかに天保年間の實務能力の所有者たる軍務官から文學の士へと舍人の比重は移っている。第二に⑪陸彥師⑫陸乂ら貴族から⑬荀士遜の如き寒士まで幅廣い階層出身者がいる事である。この二點から後期舍人の登用にも賢才主義的理念が働いていると言える。特に荀士遜や李德林が天保年間の不遇を學才により孝昭期以降の政界の中で克服し、特に李德林が舍人として草制・機密に關與している事は、後期舍人登用に楊愔らの門閥主義的人事を否定する傾向が存在した事を示している。

ちなみにこの兩者は舍人から侍郎となり詔誥を掌っている。冒頭で述べたように山本隆義氏は東魏北齊の草制權は制度上中書侍郎にあり舍人は主に上奏文の上呈と詔敕の傳達を掌ったとした。但、東魏の陸印、北齊のこの兩者の如く文才によって舍人に登用され侍郎に遷り詔誥起草した人士がいる事は、東魏北齊でも舍人が草制から排除されていなかった事を示している。李德林の明らかな例から言えば、舍人・侍郎いずれの地位で草制するかは、その人物の門地・資歷によると言えよう。

但、後主期舍人の職掌が從來からの上奏文の上呈・詔敕の下達・起草・樞密顧問のみでない事は、その多くが舍人と共に待詔文林館だった點から窺われる。文林館は既に先學によって明らかにされたように、後主の様々な文學上の諮問に答え、又修文殿御覽その他の書籍の編纂にあたった機關である。したがって待詔文林館たる人士は原則上秀れた學才の持ち主である。舍人も北魏末以來賢才の就くべきポストとしての性格を強めていた。この共通性から舍人と待詔文林館との關連性が容易に理解される。但、文林館が單なる文學サロンではなく漢人文官グループの政治的結集の場でもあったとの先

學の今一つの指摘から、待詔文林館たる士人が中書舍人の地位を兼ねていた事の今一つの意味が考えられる。即ち先述したように北齊において舍人の機能は限定されたものではなく前期の軍務官たる職掌も含め詔敕の傳達から草制・樞密顧問まで幅廣いものだった。即ち待詔文林館たる人士が文學のみならず政治世界に力を及ぼすのを可能にする地位と言えよう。換言すれば、北齊後期舍人は後主の文學上の顧問であるとともに漢人貴族・士人の文化的力を政治力へと轉化させる牽引者でもあった。顔之推が文林館の主宰者となり本官の他に舍人を領官したのは文林館を後主により近しいものとして結び附ける爲の措置だったと思われる。之推自身の本意は文林館を純粹な文學集團とする事にあったとされている<sup>(38)</sup>。しかしその本意とは關わりなく舍人の地位は彼を後主の側近として勳貴・恩倖らに印象づけ、その憎惡をかきたてたと思われる。

以上のように北齊中書舍人は從來からの舍人の性格・機能を基にしながらも、前期の軍務官・後期の文學顧問たる點に固有の性格を有していた。前期では皇帝の勳貴に對する權威確立、後期では漢人貴族・士人の勳貴・恩倖に對峙しての政權獲得への意志を背景に、その特色ある機能が發揮された。そして前期後期通してその登用には賢才主義的理念が働いていた。殘る問題は、軍務官と後期舍人とが互いにそれぞれをいかに認識し關わり合っていたか、という點である。次にこの點を含め北齊舍人の存在が提示するその歴史上の意義を考察し、結びとしたい。

#### 四 結びにかえて

後期舍人は、名族⑨封孝琰・恩倖⑩裴澤・蔭による舍人をも含め様々な階層出身者であり、多様な政治的背景を有していた。が、大率北齊末祖珽が中心となった文官グループに結集している。この文官達が唐邕・白建をいかに見ていたか、直接示す史料は無い。但、⑫張德沖の父雕虎の次の言葉は參考となろう。

(雕虎)嘗て朝堂に在りて鄭子信に謂いて曰く「さきごろ省中に入りて賢家唐令の處分を見るに、極めて所以なし。

若し數行の兵帳を作らば、雕、邕に如かず。若し主を堯舜に致し身は稷契に居らば、則ち邕、我に如かず」と(北齊書』四四 儒林)。

ここからは文を事とする者の武を事とする者への、斯文の世界に生きる者の實務を掌る者への侮蔑がありありと窺える。恐らくその感情は祖珽を始めとし他の文官にも共通していたであらうし、唐邕もそれを感じていたであらう。したがって祖珽と唐邕とが政權奪取の爲提携したとしてもそれは互いのあり様・政治理念を尊重した上でのものではなく、目前の利害によるものであり、恩倖派・勳貴など他からの働きかけによって脆くも崩れ去るものでしかなかった。筆者は勳貴の下から擡頭する軍務官、祖珽派の中の李德林ら門閥貴族の抑壓をその才によってはねのけた寒士の存在に次代を擔う新しい勢力の姿を看取している。谷川氏は勳貴擡頭の背景に様々な民衆の自由への希求、身分制打破の志向を読み取った。筆者は、この志向を北齊社會の中で新興貴族となりおせた勳貴にかわりより鮮明に擔ったのが賢才主義的登用による舍人と理解し、この新勢力が一つにまとまりえなかった點に北齊社會の限界があったと考える。

但し中書舍人の官制上の發展について北齊は注目すべき時期である。筆者は冒頭で南朝梁の中書舍人制に賢才主義的理念がみられると述べた。それは制度上、兼官制を通して實現されたというのが筆者の理解である。<sup>(39)</sup>即ち舍人が多く兼官であった爲、本官ほどには門地・資歷の制限を受けなかった。流内四班たるその官品からすれば本來就官困難な門地の高い貴族も、又流外官にしか就官しえないような寒士・寒人でも舍人が兼官だった爲、それに就く事ができたと考えたのである。

宋齊代でも恩倖たる舍人は兼官として就官し、その際の本官は當初流外官や流内七品たる舍人よりも低い八・九品官だった。彼らが舍人として權勢を強めるとその本官は高い官品のものとなるが、將軍職・各種校尉などの武職が散騎系の實質權限のない官職がほとんどだった。これに對し梁代では舍人の本官に侍中・中書・黃門侍郎など門閥貴族が清官として

占有し續けた官がみられるようになる。そしてこうした清官を本官とし舍人に就官した人士はほとんど賢才たる寒士だった。これは清官と從來權要官ではあるが濁官とされてきた舍人とを賢才たる人士の人格によって統一する試みと考えられる。即ち兼官制により門地に關わりなく人材を登用し、更に官制中の清濁の別を克服しようとしたのが梁代舍人制だった。しかしこの試みは陳代では遂行されなかった。陳代に中書侍郎を本官とした舍人は初期の蔡景歷（『陳書』一六〇）のみであり、中書官に限定してではあるが、侍郎と舍人の結合は、舍人経験者がその任を離れて後の遷官コースの中で侍郎となるケースを含めても一切見られなくなる。

北齊舍人は、就官形態から言うと同官として舍人となっている割合が高い。兼領官として舍人となったのは、④王士良（本官 給事黃門侍郎）、⑦唐遜（同 給事中）、⑧白建（同 員外散騎常侍）、⑭顔之推（同 通直散騎常侍）、⑮陸乂（同 通直散騎侍郎）であり、これ以外の人士は少なくとも史書の表現からすれば本官として就官している。更に本官として舍人となった人士のその後の遷官コースを見ると大率中書侍郎（①元文遙、③宋士素、⑥盧潛、⑨封孝琰、⑩陸彥師、⑫荀士遜、⑬李德林）、黃門侍郎（元文遙、宋士素、盧潛、陸彥師、⑫張子瑜）を経ている。即ち舍人の官は、中書・門下兩省の次官となる前に就くべき一ステップとして定着しつつあったと言えよう。前章第二節でふれた陸印・彥師ら五兄弟が次々と舍人から中書侍郎・黃門侍郎となっているのはその好例と言えよう。一旦こうした遷官コースが定着すると、新興の成り上り人士とその家族にとってこのコースに乗る事は熱望の的となる。特別な才がなく蔭によって舍人となった人士はこうした背景の中で登場したと思われる。

兼官制が人格によって本官（中書黃門侍郎）と兼官（舍人）との關連を維持しているのに對し、舍人の本官化と兩侍郎への遷官コースの定着は、舍人と兩侍郎の地位をシステムとして關連づけていると言えよう。舍人の本官化とこの遷官コースの定着は、舍人に就官しその地位を實質的に高めてきた寒士・寒人の身分的上昇・門閥主義的身分制打破への志向を根源的エネルギーとして生じた。このように北齊期に寒門・寒人の擡頭という南北朝通しての一大潮流が、官僚システム



上(40)に一つの結實をもたらした。舍人から中書侍郎へというコースは、初唐の初期中央重要文官の遷轉コースとして存在した。即ち北齊代は南北朝から隋唐代に到る官僚制發達史の上できわめて重要な時期と考えられる。

## 註

- (1) 宇都宮清吉氏「顔之推のタクチクス」(同氏『中國古代中世史研究』創文社 一九七七年 所收)。なお本文の顔之推に關する記述は、『北齊書』四五 文苑 顔之推傳に基づいている。
- (2) 南北朝の中書舍人については、山本隆義氏『中國政治制度の研究——内閣制度の起源と發展——』(東洋史研究會 一九六八年)第五・六章参照。特に梁代中書舍人については、拙稿「梁の中書舍人と南朝賢才主義」(『名古屋大學東洋史研究報告』一〇 一九八五年)、北魏の舍人については鄭欽仁氏『北魏中書省考』(國立臺灣大學文史叢刊之十四 一九六五年)第三章参照。なお本文中の北魏孝莊期・東魏舍人に關する指摘は、主に筆者の知見による。
- (3) 山本氏前掲書一九一頁。
- (4) 祝總斌氏『兩漢魏晉南北朝宰相制度研究』(中國社會科學出版社 一九九〇年)第九章第四節 北朝の中書省 参照。
- (5) 繆鉞氏「東魏北齊政治上漢人與鮮卑之衝突」(原載四川大學『史學論叢』第一期 一九四九年 同氏『讀史存稿』三聯書店 一九七八年 香港 所收)、嚴耀中氏「北齊政治與尚書并省」(『上海師範大學學報』哲社版 一九九〇—四)、漆澤邦氏「論東魏—北齊的倒退」(『魏晉南北朝史研究』四川社
- 會科學院出版社 一九八六年) 参照。
- (6) 内田吟風氏「北朝政局に於ける鮮卑・匈奴等諸北族系貴族の地位」(同氏『匈奴史研究』創元社 一九五三年 所收)。
- (7) 谷川道雄氏「北齊政治史と漢人貴族」(同氏『隋唐帝國形成史論』筑摩書房 一九七一年)。
- (8) 唐代の中書舍人については、磯波護氏「唐の三省六部」(唐代史研究會編『隋唐帝國と東アジア世界』汲古書院 一九七九年 所收) 参照。
- (9) 繆鉞氏「北朝之鮮卑語」(同氏前掲『讀史存稿』所收)、漆氏前掲論考。
- (10) 周一良氏『魏晉南北朝史札記』(中華書局 一九八五年)四〇六頁、嚴氏前掲論考。
- (11) 楊耀坤氏「東魏北齊兵制概論」(中國魏晉南北朝史學會編『魏晉南北朝史論文集』齊魯書社 一九九一年)。
- (12) 京畿大都督については、濱口重國氏「東魏の兵制」(同氏『秦漢隋唐史の研究』上卷 東京大學出版會 一九六六年 所收)、楊氏前掲論考 参照。
- (13) 楊氏前掲論考。
- (14) 谷川氏前掲書二七二頁。
- (15) 谷川氏前掲書二七三—四頁。

(16) 嚴氏前掲論考。

(17) 谷川氏前掲書二九三頁。

(18) 劉裕の東府城の覇府は、「義熙」四(四〇八)年正月、徵公入輔、授侍中・車騎將軍・開府儀同三司・揚州刺史・錄尚書、徐兗二州刺史如故」(『宋書』一)とある入朝輔政時に設置されたと思われる。但し、その四年前桓玄を建康から驅逐した元興三(四〇四)年三月に、「於是推高祖爲使持節・都督揚徐兗豫青冀幽并八州諸軍事・領軍將軍・徐州刺史」(同前)とあるように、その時點から劉裕は實質的に覇者であり、京口に覇府を有していたと言える。

蕭道成は、元徽五(四七七)年七月の劉宋後廢帝の死の直後東府城に入り、「進位侍中・司空・錄尚書事・驃騎大將軍……太祖固辭上臺、即驃騎大將軍・開府儀同三司」(『南齊書』一)とある。この時點でその覇府が開かれたと言えよう。

(19) 蕭衍は南齊東昏侯の永元三(五〇二)年(和帝の中興元年)十二月丙寅の東昏侯の殺害後に「授高祖中書監・都督揚南徐二州諸軍事・大司馬・錄尚書・驃騎大將軍・揚州刺史……」(『梁書』一)とあるように覇府を有した。東昏侯の死の二十日後、「丙戌、入鎮殿內」(『南史』六 梁本紀上)とあり、その覇府が臺城内に置かれた事が明らかである。

(20) 蕭衍は覇府開府後二箇月で梁の國臺を置き、更に二箇月後の中興二(天監元)年四月受禪を迎えている。蕭道成は東府入城の二年後、即ち昇明三(建元元)年三月に齊國臺を建て、翌月即位する。劉裕は、東府入城から八年後の義熙十二(四一六)年十二月宋公に封ぜられ侍中・黃門侍郎・尚書左

丞らの官が國臺に置かれた。更に四年後の元熙二(永初元)年六月に即位している。これらの經過については宮川尙志氏「禪讓による王朝革命の研究」(同氏『六朝史研究 政治・社會篇』日本學術振興會 一九五六年 所收) 參照。

(21) 蕭衍革命軍團については、安田二郎氏「南朝の皇帝と貴族と豪族・士豪層——梁武帝の革命を手がかりに——」(『中國中世史研究』東海大學出版會 一九七〇年 所收)、越智重明氏「州將蕭衍の學兵をめぐる」(『軍事史學』九 一九六七年)、蕭道成の革命軍團については安田氏「蕭道成の革命軍團」(『愛知縣立大學文學部論集』二一 一九七一年) 參照。

(22) 劉裕の革命軍團については、川勝義雄氏「劉宋政權の成立と寒門武人」(同氏『六朝貴族制社會の研究』岩波書店 一九八二年 所收)、石田德行氏「劉裕集團の性格について」(『木村正雄先生退官記念東洋史論集』一九七六年 所收)、吉川忠夫氏「劉裕」(人物往來社 一九六六年) 參照。

(23) 「是年、於長城內築重城、自庫洛拔而東至於塢紇成、凡四百餘里」(『北齊書』四 帝紀第四 文宣 天保八年の條末尾)。

(24) 「天保」八年徵鄒赴鄆、仍除北朔州刺史、都督北燕・北蔚・北恆三州、及庫推以西黃河以東長城諸鎮諸軍事。鄒慰撫新遷、量置烽戍、內防外禦、備有條法、大爲兵民所安。……九年、車駕幸樓煩、鄒朝於行宮、仍從還晉陽。」(『北齊書』十三 趙郡王叔傳)。

(25) 谷川氏前掲書二九三頁。

(26) 「及(文宣)帝崩於晉陽、驛召收及中山太守陽休之參議吉

凶之禮、并掌詔誥。……及孝昭居中宰事、命收蔡中爲諸詔文、積日不出。轉中書監。皇建元年、除兼侍中・右光祿大夫、仍儀同・監史。……而孝昭別令(陽)休之兼中書、在晉陽典詔誥、收留在鄴。……又除祖珽爲著作郎、欲以代收」(『北史』五六 魏收傳)。魏收と楊愔との交友關係については、『魏書』についての「於是衆口誼然、號爲『穢史』、投牒者相次、收無以抗之。時左僕射楊愔、右僕射高德正二人勢傾朝野、與收皆親。收遂爲其家並作傳、二人不欲言史不實、抑塞訴辭、終文宣世、更不重論」(同前)という記事からもその一端が窺われる。

(27) 「(和士開)又除尙書左僕射、仍兼侍中。……至說武成云

『自古帝王、盡爲灰土、堯舜桀紂、竟復何異。陛下宜及少壯、恣意作樂、從橫行之、卽是一日快活數千年。國事分付大臣、何慮不辦。無爲自勤約也。』帝大悅、於是委趙彥深掌官爵、元文遙掌財用、唐邕掌外兵、白建掌騎兵、馮子琮・胡長粲掌東宮」(『北史』九二 恩倖 和士開傳)。

(28) 「(祖)珽善爲胡桃油以塗畫、爲進之長廣王、因言「殿下有非常骨法、孝徵夢殿下乘上天」。王謂曰「若然、當使兄大富貴」。及卽位、是爲武成皇帝、擢拜中書侍郎」(『北史』四七 祖珽傳)。

(29) 「始奏罷京畿府併於領軍、事連百姓、皆歸郡縣、宿衛都督等號位從舊官名、文武服章並依故事」(『北史』祖珽傳)とあるように、京畿大都督府の廢止を實際に行なったのは祖珽である。この廢止によって鄴の宿衛官を統括する唯一の組織となった領軍府に對し珽は、一般民庶に關連する事務は當該の

郡縣官衙に權限を移したりするなどの制度改革を實行している。同傳の書き方によると祖珽は武平三年七月に斛律光を死に追い込んだ後、領軍將軍の地位を切望し、勳貴高元海・恩倖韓長鸞らと對立したとあるが、恐らく前年十月の京畿府の廢止時から領軍府への控制を開始していたと思われる。なお祖珽が京畿府の廢止によって同府に集結していた鮮卑軍士の力を弱めようとしたとする繆鉞氏の指摘(同氏前掲「東魏北齊政治上漢人與鮮卑之衝突」)は注目に値する。

(30) 繆鉞氏前註所掲論考、吉川忠夫氏『六朝精神史研究』(同朋舍 一九八四年)第九章 顏之推論、宇都宮清吉氏「北齊書文苑傳内顏之推傳の一節について」(同氏前掲書所收)參照。

(31) 『北史』八 齊本紀下に「(武平)四年春正月戊寅、以并省尙書令高阿那肱爲錄尙書事」とあり、『北齊書』五〇 恩倖傳に「武平四年、令其錄尙書事、又總知外兵及內省機密」とある。

(32) 「屬周師來寇、丞相高阿那肱率兵赴援、邕配割不甚從允、因此有隙」(『北齊書』四〇 唐邕傳)。

(33) 「車駕將幸晉陽、敕孝卿總知騎兵度支、事多自決、不相詢稟。邕自侍從霸朝以來常典樞要、歷事六帝、恩遇甚重、一旦爲孝卿所輕、負氣鬱快、形於辭色。帝平陽敗後、狼狽還鄴都。邕懼那肱譖之、恨斛律孝卿輕己、遂留晉陽、與莫多婁敬顯等崇樹安德王爲帝。信宿城陷、邕遂降周」(同前註)。

(34) 「(安德王)延宗見士卒、皆親執手陳辭、自稱名、流涕鳴噎。衆皆爭爲死、童兒女子亦乘屋擗袂、投甌石以禦周軍」

〔北史〕五二 安德王延宗傳。

(35) 〔武平五年〕二月乙未、車駕至自晉陽。朔州行臺南安王

思好反。辛丑、行幸晉陽。尙書令唐嘗等大破思好。〔北史〕八。

(36) 註(30)所揭諸論考參照。

(37) 同前註。

(38) 註(30)所揭吉川氏論著二九一頁 參照。

(39) 註(2)所揭拙稿參照。

(40) 孫國棟氏『唐代中央重要文官遷轉途徑研究』(龍門書店一九七八年)一八一頁 參照。

青海 that include details of military law regulating the conferral of these titles. In this paper, I analyze the nature of these strips and attend to link the titles bestowed on soldiers with their specific military achievements.

These strips show that there was close restriction of titles bestowed for military distinction, although this form of imperial recognition became more common during the latter half of the Former Han. To compensate for the relative infrequency of the conferral of titles, gifts of cash were also given to soldiers in recognition of military achievement. I also analyze in this paper the distinction between Baijue 拜爵, or titles conferred specifically in recognition of military achievements, and Cijue 賜爵, titles bestowed in recognition of non-military services.

## ON THE NATURE OF THE ZHONGSHU SHEREN 中書舍人 UNDER THE NORTHERN QI 北齊

ENOMOTO Ayuchi

Under the Northern Qi regime, the functions of the Zhongshu Sheren, or privy secretariat, included the drafting and implementation of imperial orders and decrees, in addition to exercising control over all civilian and military classified information. In the Tianbao 天保 period, the officials of the Zhongshu Sheren were in charge of military affairs. These officials were appointed to their posts in order to assist Emperor Wenxuan 文宣帝 to resist the pressure of the Xungui 勳貴, or “meritorious dignitaries”, and for the purpose of gaining control over the military.

In the latter half of the dynasty, many officials of the Zhongshu Sheren served Emperor Houzhu 後主 as literary advisers. These officials were primarily civilians who had risen to power in struggled against Enxing 恩幸, the emperor's favorites, and against the Xungui. Most of the officials of the Zhongshu Sheren under the Northern Qi were selected on the basis of their accomplishments, including literary and business ability, regardless of their family status. The selection of these officials was thus based on the system of recognition of merit, a system which was to become a

distinctive characteristic of the latter part of the Southern and Northern Dynasties period. This practice of official appointment based on merit was also a distinctive characteristic of the Zhongshusheng 中書省, or bureau of the imperial secretariat, under the Northern Qi regime.

## THE EARLY ACTIVITIES OF SHI CUNTONG 施存統 IN THE FOUNDING OF THE CHINESE COMMUNIST PARTY

ISHIKAWA Yoshihiro

Shi Cuntong (1899—1970) was a main figure in the Chinese Communist Party (CCP) in its early period. He is known not only as a leading figure among Chinese communists in Japan during the CCP's first congress days, but also from the fact that he served as the first secretary of the Chinese Socialist Youth Party, established in May, 1922.

As early as the May Fourth period, Shi took part in the Labor-learning Mutual Aid Corp in Beijing 北京工讀互助團. After the dissolution of this corp, Shi went to Shanghai to participate in the organization of communists initiated by Chen Duxiu 陳獨秀, Li Hanjun 李漢俊 and their faction. By June, 1920, the assembly of communists in Shanghai, including Shi himself, had been established under the name of "The Socialist Communist Party" 社會共產黨. Shortly thereafter, with the support of Dai Jitao 戴季陶, who had been instrumental in Shi's conversion to Marxism, Shi traveled to Tokyo for study. Acting in conjunction with the communists in Shanghai, in Japan Shi engaged in underground maneuvers for the communist movement in both China and Japan. These activities resulted in an order for Shi's deportation issued by the Japanese government at the end of 1921.

This paper investigates Shi's activities in Shanghai and Japan using newly discovered materials, including documents from the Ministry of Foreign Affairs in Japan. On the basis of these this paper brings to light additional facts concerning the founding of the CCP.